

歴史研究の場を一般市民の手に

—今こそ、草莽決起の時—

梅野敏明

はじめに

近年、青年誌を中心に大日本帝国時代の戦争を題材とした漫画が世に出ている。具体的に名前を挙げれば、講談社発行の『モーニング』からはかわぐちかいじ氏の「ジバング」・小学館刊の『週刊ビッグコミックスピリッツ』から江川達也氏の「日露戦争物語 天気晴朗ナレドモ浪高シ」・集英社刊『週刊ヤングジャンプ』から本宮ひろ志氏の「国が燃える」がある。これらの漫画を一読した上で、私はこれらの漫画には一つのメッセージを若者達へ向けて発していることに気付く。それはアジア太平洋戦争の敗戦を出発点とする平和民主主義国家日本がいつまでも今のままの状態がいいのかということである。自衛隊の海外派遣を始めとする国家防衛・国際貢献上の見地からの憲法改正が盛んに議論されるようになったことが背景となって、今日まで侵略戦争として大日本帝国がおこした明治時代から終戦までの一連の戦争とそれに携わった帝国軍人達の物語をフィクションを交えながらとりあげて再評価しようという動きが出てきたものと私は考える。

こうした動きの是非を述べることは本論の趣旨ではないので言及はしないが、漫画というメディアで若者達に大きな影響を及ぼしていることを考えると、日々歴史を学び研究している一市民の私としては恐しさを感じるのである。文字だけでなく、絵も使って強く訴える手法は読めば読むほどその世界にひきこまれ、そこから知ったことをフィクションの部分を除いた上で吸収することにとどまるのみで、本当に歴史を考えようとする方向へなかなか進むことができないのではないのだろうか。

もし、漫画の読者が作者の主張をそのままのみにしてしまつたら、戦前の日本に対する認識を誤まり、ひいては現代の日本の進路を誤まるきっかけとなるかもしれないのである。

又、逆に作者のメッセージを無視することやくだらないものと一笑に付すことも問題である。

もし、前に挙げた漫画が読んで何か思うことがあるのなら、自分で当時の公文書や日記などの歴史史料を読んでみて戦前社会について考えることが好ましい。

しかし、その重要な歴史史料が平成の市町村合併を期に失なわれてしまう危険性が高まってきているのである。

二 歴史研究・学習と歴史史料

日本には明治以来の行政文書などが中央省庁や各都道府県庁、市町村役所に保管されている。それらの行政文書は近現代史を考察する上での貴重な歴史史料となりうる。

しかし、この歴史史料は行政機関に保存されている段階では市民レベルの人間には利用することが難しい状態にある。

公文書館のような史料を専門に取り扱う施設が行政文書を分類・整理を行い、保存修復処理を施した後初めて世間に公開されるのである。この段階で一般市民が自らの歴史研究のために利用できるのである。

と言うことは、公文書館などの施設ができない限りは歴史史料としての価値のある公文書館などを利用することは難しいものと思われるのである。

公的機関が管理する公文書ですらこの様子なので、個人が所蔵している古文書などの歴史史料を直接目にして利用することはほぼ不可能に近い。

個人の家が所蔵している文書の一部は東京大学史料編纂所が影写本などを持っているが、これらを利用するためには大学教員といった人たちの紹介が必要となる。大学教員や博物館学芸員といった研究者とのつながりをもった限られた人達しか利用できないし、高い旅費を支払って東京へ行かなくてはならない。

これまでに挙げたこと以外にも、様々な要因で一般市民が歴史史料を容易に利用することを妨げているのである。これには、今までの歴史研究が公的機関や大学を中心にしてきたためではないのかと私は思う。

三 もっと開かれた歴史研究の場を

明治時代に近代科学としての歴史学がドイツより流入してから、歴史学研究は旧帝国大学を頂点とするアカデミズム（官学流）歴史学が主流となった。戦前には大学教員の発言に大きな権威があり、そうした大学教員の席は旧帝国大学出身の学者で占められていた。

その傾向は現代でも変わらず、私を含めた現代人の大半はついつい学識者の発言を権威としてありたがってしまう。そして、権威に対しては何ら疑うこともなく盲従してしまうことがよくある。その原因は学識者が記した著作物を読んで、知識を蓄えることのみを終止しているからだと思ふ。

本当に、その当時の社会を考えるためにはその時の歴史史料をよりどころにしないでならぬ。その中に記された事をくみとって考察していくことが、真に歴史を評価することにつながる。

幸いなことに近年、古文書を直に目にふれて歴史を考えていきたいという動きが一般市民の間で広がっている。

古文書の独習テキストや解説のサークル、通信講座が次々とできていくという。この動きは一般市民に対して歴史を研究し、発表する場ができたから十分に研究活動ができる基盤となっている。大分県地方史研究会を始めとする大分県下の各研究会、史談会はこうした人達に門戸を広げ、素朴な疑問を大切にするといい態度をもつことが好ましい。

大分県史のさらなる解明の為にさらにハイレベルな研究を求めることは使命の一つである。しかし、それにこだわるあまり、一般市民が日ごろいだいている疑問に研究上の重要なテーマがあつたりするものである。こうした人達がいだいている疑問に研究上の重要なテーマがあつたりするものである。案外、

大学や博物館などの研究施設のみでリードしている密室的なアカデミック（官学流）歴史学ではなく、学識経験者と一般市

民とが共に手をとりあって活動していく開かれた場で土地に根ざして行われる草莽の歴史学・草の根の歴史学こそが二十一世紀の歴史学の場に求められているのである。

そして、古文書を読解する力をつけた一般市民がさらなる歴史研究発展のために積極的に参加する時であると私は思う。そのためにも近代史料である公文書を廃棄することなく、広く公開してもらいたいものである。

おわりに

今まで、歴史研究の話を基礎にして話を進めてきた。その中には私の学力不足や認識不足による誤解もあっただろうし、空虚な書生論になっていた部分もあっただろう。

しかし、国や地方公共団体による歴史を含めた教育・文化事業は「財政再建」を錦の御旗にして十分な予算をあてることもできず、衰退の一途をたどっている。いわゆる「上からの」の教育・文化事業はもはやあてにはできない状態になっていると私は判断せざるをえない。

今こそ一般市民の立場から草莽決起する時がきている。自分たちが住んでいる歴史や文化は自分たちの手で守り、研究していくことが二十一世紀の歴史学の基盤である。これが草莽の歴史学とも、身近な土地にどっしり根をはやすことから草の根の歴史学とも言うべきものである。

まずは、「財政再建」のための市町村合併から公文書を守り、我らの手にとりもとそうではないか。そして、さらなる大分県の地域史（地方史）の発展のために立ちあがるうではないか。